広島芸術学会活動報告

二〇〇一年七月～二〇〇二年六月

米門公子

▼平成十三年七月七日(土)

第十五回総会・大会案内を兼ねた会報第六十三号を発行。巻頭ページに総会・大会の日程を掲載。大会の主旨・案内、開催への思いは水島裕雅委員が執筆した。それに続き、大会での発表予定者がそれぞれのレジュメを寄せた。

例会報告は、世界の化粧筆の六十五%を生産している広島県安芸郡熊野町を訪ねた「第五十六回例会」について。津島由里子氏が、当日の見学コース「筆の里工房」→「㈱高本製作所」→「㈱高本製作所展示室」で、体験したことや見学した内容、感想などを細やかに報告した。

▼平成十三年七月二十九日(日)

第十五回総会・大会を広島大学東千田校舎で開催した。午前九時から研究発表の開始で、トップバッターは、広島大学大学院の中尾和恵氏。タイトルは「世阿弥当時の観客による能楽の享受に関する一考察　―世阿弥の伝書を手がかりにして―」で、世阿弥の残した伝書を手がかりとして当時の観客の享受、そして世阿弥の観客に対する考え方について考察した。続いて日本学術振興会特別研究員の蔵本典之氏が、「文学の意味と価値」と題する発表を行い、芸術ジャンルのうちでも、文学を中心にして、そこでの意味と価値との関係を論じた。三番目の発表は岡山大学大学院の橋村直樹氏による「イスタンブール、ハギア・ソフィア大聖堂の後陣モザイクについて―聖母子像の成立年代に関する一考察―」。現存する後陣の聖母子像と総主教フォティオスの説教において賛美される聖母子像との関係を確認した上で、成立年代に関する研究を振り返り、その問題点について指摘した。午前中最後の発表は、広島大学大学院の杉原早紀氏による「井上ひさし『父と暮らせば』『紙屋町さくらホテル』―九十年代に語られた二つの『広島の物語』―」。二つの戯曲の内容や語

りを比較することにより、この違いは何か、どこから生じるのか、そもそも同じ広島を舞台とするテクストがなぜ別のものとして書かれたのかなどについて考察した。

昼休憩の後、十三時から十三時四十分の間に、総会を開催した。進行役は当学会事務局長の大橋啓一氏。担当の委員が平成十二年度の事業報告の後、平成十三年度の事業計画と予算案を提出し、そのまま承認された。今年度は委員改選の年に当たっているので、新しい委員候補者が発表され、これもまた承認された。詳細は「藝術研究２００２」の巻末に掲載される。

午後から大会を再開、残りのもう一つの研究、広島市立大学の服部等作氏による「メソポタミア初期王朝以前における玉座について―玉座とそのデザインに関する研究(1)―」が発表された。特別な人物の象徴的な指定席ともいえる玉座（王座、法座、神座）について、その性格とデザイン獲得課程の研究が主な内容だった。

大会の締めくくりは、シンポジウム「広島と／の文学」。それに先立ち、広島大学の岩崎文人氏が「広島の文学」と題して基調講演を行った。内容は備後文化圏の文学者をその主要な対象とする〈ふくやま文学館〉と対をなす安芸文化圏の文学者を取り上げた〈ひろしま文学館〉を建設し、両者を統合する形で、広島の文学をとらえ、継承していくべきという提言を行った。同時に、安芸文化圏の文学を、鈴木三重吉を源流とする児童文学、小山内薫から始まる劇作家の系譜、原民樹を初めとする原爆文学の系譜の三観点に絞り、自らの考えを述べた。

シンポジウムで、パネリストの「ぎんのすず研究会」代表、三浦精子氏は、「ぎんのすず」を実際に見せながら、この中に発表された作品群が戦後の児童文学史や絵本史、漫画史をも書き換えさせる資料であると説明、また作品群から見えてくる時代性についても言及した。司会役の水島裕雅氏は、これまで広島に文学館がつくられなかったのは、「広島に大した文学がない」からではなく、近代文学において、広島が果たした役割について、我々が知らなかったか、正当に評価してこなかったからではないかと述べた。参加者は五十四名だった。

大会終了後、中区大手町の居酒屋で講師を囲んで懇親会を開催した。

▼平成十三年十月二十二日(月)

会報第六十四号を発行。巻頭言は、名古屋・中京女子大学の加藤博子氏が担当。一九七〇年代に旧ソ連で制作された人形アニメーション映画「チェブラーシカ」を見た感想、この映画の背景、そして最近訪れたベルリンの映画事情などを書いた。第十五回大会報告は、研究発表①広島大学大学院の中尾和恵氏による「世阿弥当時の観客による能楽の享受に関する一考察　―世阿弥の伝書を手がかりにし

て―」（報告者・長迫英倫氏）、研究発表②日本学術振興会特別研究員である蔵本典之氏の「文学の意味と価値」（報告者・大山範子氏）、研究発表③岡山大学大学院の橋村直樹氏による「イスタンブール、ハギア・ソフィア大聖堂の後陣モザイクについて　―聖母子像の成立年代に関する一考察―」、研究発表④広島大学大学院の杉原早紀氏による「井上ひさし『父と暮らせば』『紙屋町さくらホテル』　―九十年代に語られた二つの『広島の物語』―」、研究発表⑤広島市立大学の服部等作氏の「メソポタミア初期王朝以前における玉座について　―玉座とそのデザインに関する研究（1）―」（報告者・森園　敦氏）およびシンポジウム「広島と／の文学」（報告者・上野　仁氏）について。

▼平成十三年十二月一日（土）

会報第六十五号を発行。巻頭言は井野口慧子氏の詩「きみが生まれた日」。氏の次男の巣立ちのようすを情感豊かに綴った。なお、この詩は二〇〇二年九月に東京文化会館で本選会が開催される第十四回・新・波の会日本歌曲コンクールで、作曲と声楽部門の課題詩となった。例年だと、九月に予定している例会を開催しなかったので、例会報告はなく、次回例会の案内のみを掲載した。

▼平成十三年十二月十五日（土）

第五十七回例会をエリザベト音楽大学で開催、二つの研究発表を行った。まず一つ目は、尾道白樺美術館学芸員・佐藤智子氏による「ベルト・モリゾの化粧室における鏡について」。ベルト・モリゾ（一八四一～一八九五）が一八九〇年に制作した『姿見にて』に注目して、彼女が女流画家として当時置かれていた状況やこれまで指摘されてきたモリゾの自己没入的特徴を踏まえながら、彼女の自己表象と画中のモチーフとの関連を考察した。

二つ目はエリザベト音楽大学のホアキン・M・ベニテズ氏の「明治四〇年～大正十二年出版の讃仏歌における讃美歌の借用について」と題する研究発表。明治四〇年から大正十二年に出版された百十七曲の讃仏曲のうち、十四曲は、当時日本ですでに親しまれていたプロテスタントの讃美歌の旋律を使ったものであることが判明していること、さらに讃仏歌の歌詞における讃美歌の歌詞からの影響についても見解を述べた。参加者は四十二名。

例会後、懇親会を開催した。

▼平成十四年二月十一日（月）

会報第六十六号を発行。巻頭言は津島由里子氏の「アフガニスタンのチャドリ」。二〇〇一年九月十一日、米国で起きた同時多発テロ事件以来、アフガニスタン情勢がメディアで流されることが多く、

民族衣装である「チャドリ」に関心が高まっている折で、タイムリーなエッセイとなった。例会報告は、尾道白樺美術館学芸員・佐藤智子氏の「ベルト・モリゾの化粧室における鏡について」（報告者・竹中純子）、エリザベト音楽大学のホアキン・M・ベニテズ氏の「明治四〇年～大正十二年出版の讃仏歌における讃美歌の借用について」（報告者・馬場有里子）の二つ。

インフォメーションでは美術展の案内三つと「中国短編文学賞」の作品募集を掲載した。

▼平成十四年二月二十三日(土)

第五十八回例会を新しく開館した広島市留学生会館で開催した。最初の発表はエリザベト音楽大学大学院・馬場有里子氏の「十七世紀後半のフランス礼拝堂におけるグラン・モテとギョーム・ミノレの作品」と題するもの。テーマは十七世紀後半のフランス、ルイ十四世時代の王室礼拝堂において毎日のミサの間に演奏されていたグラン・モテと呼ばれる宗教合唱曲についてであった。続いての発表は広島大学大学院・八木茂樹氏による「神話を語るということ」。およそすべての民族が独自の神話を語り伝えてきた。その神話を語ることを通して、人々は何を語り伝え、語りに何を託していたのか。このことを明らかにするとともに、神話が果たしてきた意義を引き継ぐものを提示しようとする発表だった。参加者は三十八名。

▼平成十四年五月一日(水)

会報第六十七号を発行。巻頭言には岩手県平泉にある中尊寺金色堂のしっとりと落ち着いた金色の美しさに魅せられて久しい」という広島修道大学の松本 真氏が、「黄金の茶室」を執筆した。例会報告は、エリザベト音楽大学大学院の馬場有里子氏の「十七世紀後半のフランス王室礼拝堂におけるグラン・モテとギョーム・ミノレの作品」（報告者・上野 仁氏）と、広島大学大学院の八木茂樹氏による「神話を語るということ」（報告者・長迫英倫氏）を掲載した。

会員の動向などを紹介するために今号から新設した〈ほっと・ホットニュース〉では、会員の木原和敏氏と本家浩一氏の県民文化奨励賞受賞（美術部門）を紹介した。

また、第五十九回例会で訪れることになっている広島県山県郡加計町の「加計せせらぎ美術館」に、当学会会員の染色作家、杉谷富代氏が生涯作品二百二十三点を寄贈したこと、作品集「水の記」を出版したことなどを、写真撮影を担当したカメラマンの藤恵乾吾氏が報告した。

▼平成十四年五月三十日(木)

東京にある日本学術会議会員推薦管理会というところから、「日本学術会議第十九期会員の選出にかかわる学術研究団体登録について」という書類が届いたので、さっそく申請のための書類を整え、

送付した。

▼平成十四年六月九日(日)

第五十九回例会は一年ぶりの野外例会で、広島県山県郡加計町に新しくオープンした「加計せせらぎ美術館」を訪れた。加計町までのアクセスには今、廃止が取りざたされているJR可部線を利用し、渓谷の春の景色を楽しんだ。

この美術館で、六月四日から八月四日の期間、「杉谷富代 生涯作品展パートI」が開かれており、この展示に合わせての例会開催だった。また運の良いことに、この日は同町内にあり、春と秋の決められた日にしか一般公開されない広島県の名勝「吉水園」の開園日に当たっており、午後は園内の散策を楽しんだ。同園は江戸時代中期につくられた美しい庭園で、珍しいモリアオガエルの生息地としても有名。期待通り、緑鮮やかなモリアオガエルが池の周囲のあちこちにいて、入園者を喜ばせていた。参加者は二十四名。

《平成十四年六月三十日現在、法人会員七法人、個人会員二百五十四名（特別会員四名、一般会員二百十八名、学生会員三十二名）》

（こめかど・きみこ　広島芸術学会事務局）